



特定非営利活動法人

アーシヤ

アジアの農民と歩む会

会報  
67号

10月26日マキノスクールのコミュニティー稲刈り



## 衣食足りて共に生きる為に

アーシヤ理事 開 義民  
前・熊本県ペンション協会理事長

今年はコロナ禍の為1年遅れてTOKYO-2020オリンピックが開催されました。前回の東京オリンピックが開催された57年前、1965年（昭和39年）の頃の日本は高度経済成長の波に酔いしれていました。もはや、戦後では無いと云う事も云われる様になっていました。

その様な日本人の事をエコノミックアニマルと呼び、アジアの国々の人達からはバナナと揶揄される事も。つまり外見は我々アジアの同胞のように黄色の肌をしているものの、中身は白人と同じ考えをしているのでバナナ等と云われていました。

しかし、当時の世界ではあちこちで紛争が起こっていました。ここアジアに於いても南北ベトナム戦争が1955年に始まり段々と激しさを増していたのでした。その頃戦場カメラマンの1枚の報道写真が私の目に止まったのでした。10歳くらいの浅黒くて裸の痩せた少年が素足で眼光鋭くカービン銃を肩にかけて写っていたのです。しかし、数日後にその少年は亡くなったとのことでした。

私は戦後生まれで、先の大戦を経験した訳ではありませんが、当時のアジアの国々では悲惨な戦いの現実、こ

の1枚の報道写真を見てショックを受けたのでした。少なくともこの少年が食事をお腹いっぱい摂ることが出来ていたなら、痩せた体に銃を担いで戦場に行く事も無かったかも知れないし、無駄な争いに巻き込まれる事もなかったのでは無いだろうか？

ここで思い出されるのは、アメリカの心理学者（アブラハム・ハロルド・マズロー）の「マズローの法則」です。簡略して考えると、基本的にはまず第1に飢えを解決して、食料の安定確保、次に、家族・友人を守り、教育を受けて自分の成長・夢を目指すとするが・・・

まだ一部のアジアの国々では貧富の差が多く、食事はおろか教育も満足に受けられない子ども達も多く、政治家は自分達の利益ばかりを考えている人が多く見られるようです。

しかし、将来の祖国を支える子ども達の為に、マズローの法則に当てはめて考えるなら、第一段階の食欲を含めた生理的欲求～安定した食料の確保～安全な社会～そして夢の実現に向けて私達に出来る事は何だろうか？

一人では何も出来ないかも知れないが、その一人が始めなければ何も出来ない！アーシヤでは弱い立場の女性や子ども達の自立とその社会的実現を目指して「共に生きる為に」今日の一步を支えて行きます。



## 栄養改善に何が必要か？

アーシャ事業統括責任者 三浦 照男

北インドの農村で栄養改善プロジェクトに携わって10年以上になります。国連機関の報告によると世界の2割の子どもたちが発育阻害（日常的に栄養を十分摂れず年齢不相当の低身長の状態）で、インド平均は3割強とのことです。しかし、私たちが育成した保健ボランティアの調査結果によると、活動地域の発育阻害率は5割以上にもなります。村々を回っても、確かに栄養が足りていないなと、わかる子どもたちをよく見かけます。特に、零細・小規模農民が多く住む村においてそれが顕著です。人口の6割以上が農村で生活し、その7割以上が零細または小規模農民であることを鑑みれば、栄養問題は国家的重大課題の一つです。更に経済力だけで、解決できないことも理解できます。それは以下に述べたいと思います。

一般的にインド人の食べものに対する観念や嗜好は日本人からするとかなりミステリアスです。慣習的にも哲学的にも宗教的にも食べものに関してインド人は敏感に反応します。信号で例えれば以下のようなようです。赤信号は、宗教上や信条、更には迷信や願掛けのために「絶対に」口にしない食べものがあります。代表的な事例はカーストの上下に関係なくヒンドゥー教徒にとって牛肉はご法度、イスラム教徒は豚肉です。更に上位カースト層に多いようですが、厳格な菜食主義者はあらゆる魚肉、卵を口にしないばかりか、知らない野菜や食べものは口にしない傾向にあります。

女性の食べものの慣習的な規制もあります。男の子や男子家族は卵や鶏肉を食べているけれど、母として、妻として、或いは女子として食べないという女性が多いのです。これは宗教的というよりは迷信や家族の幸せを願う善き母親、また妻としての当然の行為として考えているようです。栄養のあるものは家族に、私は我慢しますということなのかもしれません。これは結婚する前から女子に与えられる慣習的モラルのようなもので、将来、母になるべき思春期女子の貧血を招き、栄養不良の母親から低出生体重児が生まれるという悪循環を招きかねません。しかし世の一般としては、結婚を迫る男性に「私は肉食です」とチキンを食べて見せたら、誰も寄らなくなったという実例がある程です。実際、マキノスクールで働いている20人ほどの貧農出身者の農村女性の食事を

みるとチキンカレーや卵カレーを食べる者は20人中2名のみです。一方、女性と同じ社会環境の男性スタッフは全くその反対で、8割以上は好んで肉や卵カレーを食べるのです。このような伝統的価値観も栄養改善の弊害となっているようです。

この他に、日本では栄養価が高く好んで食べられているモロヘイヤ、雨にも強い空芯菜等はインドでは自生しているにも関わらず、ほとんど食べようとしません。動物の食べもの、或いは、貧民の食べものとして嫌うのです。また、妄信も無視できません。私たちが推奨しているモリंगाは薬効があり栄養価も高いことは知っているけれども、家の周りに植えたくないという村民が結構いることもわかってきました。「モリंगाの急速な成長は、家族の生気をも奪ってしまう」といった妄信です。せっかく育ったモリंगाの木を家族に不幸が起きると直ぐに切ってしまうということが起きているのです。

世界三大伝統医療と言われるアーユルヴェーダがインドにはあります。薬草、食べものに関して詳細な効果や作用を見出しているだけでなく、精神や体のバランス、自然のバランスなどの重要性を指摘している高度な哲学ともいえるものです。数千年前から現在に至るまで活用されているのです。街中を歩けば、アーユルヴェーダの診療所や薬局が点在しています。もちろん、モリंगाも重要な食べものと認識されています。

このように、自然の摂理を重んじる誇りある伝統がありながら、食べものをバランスよく食べるという大切なことを失いかけているように思えます。病気は薬で治る、という安易な風潮が広がり始めているようです。農村部では数か月の研修受講で薬屋を始める即席薬剤師が増えました。彼らは「ドクター」と呼ばれ、街の病院まで行くことができない農村住民に対し、薬販売のみならず、注射治療までしています。薬大国にもなったインド政府と企業が一体となりジェネリック医薬品を国内需要を高めるために農村に売り込もうとしている意図がうかがえます。

お金や薬だけでは健康は得られません。バランスのよい食べものを日常的に摂ることで健康になることを新たな慣習として根付かせることが必要です。インドの古代医学にはそのベーシックが潜んでいるのです。今後も様々な角度から活動していく必要があります。





## アーシャ フェアトレードの今！ モリンガ & 縫製作品の販売戦略

アーシャ代表

国内事務局 加工・販売担当 三浦 孝子

アーシャでは、北インド農村女性の自立と収入向上を目指して、彼女たちが取り組んでいる活動の中から、豊かな栄養成分と機能性成分を含むモリンガパウダーやその加工品、また、縫製作品を日本の皆様に販売して、売上を農村女性に還元するという取り組みを行っています。

地元的那須塩原市、栃木県内はもとより、全国の11店舗のお店に委託・買取販売をお願いしています。また、出店の機会があれば、積極的に参加して、地元のみなさまと顔見知りになり、アーシャの活動紹介をする機会とさせていただいております。委託・買取販売につきましては、試行錯誤のうちに徐々に取引先が増えてきて、コロナの影響はありますが、ゆっくり商品が動いています。商品販売担当になった当初は、どんなお店に置いてもらえるのか悩み、同情で置いてもらっても、商品が動かないのでは意味がないため、アーシャ側からもお店を選ぶ必要がありました。気になるお店を見かけると、アポなしの飛び込み営業もしました。（営業マナー違反ではありませんが）大半は断られることが多いのですが、受け入れてくださり、今もお取引させていただいているお店もあります。

フェアトレードタウンを標榜している都内のお店に飛び込み営業した時は、店長さんより「フェアトレードではもう人を呼び込めない時代ですよ。このあたりでは、シニアの方が、普段使いの食品がなくなると、それだけを買いに来てくださるだけ。ハンディクラフトは、ほとんど動かないんですよ」と、実情を教えていただいたこともあります。あるNGOの方からは、「今は、食品ですよ、たとえば、コーヒーであれば、好きな方は毎日消費する、美味しい豆を提供すれば、リピートして下さるから」とも。何事も勉強でした。

アーシャでは、2012年から少しずつ販売事業を開始、当初はヒマラヤ岩塩や岩塩入りの入浴剤が主な商品でしたから、収益はさほど期待できませんでしたが、岩塩を定期購入して下さるお客様はいらっしゃいますが、手間賃、輸送費を考えると、現地に還元できるほどの収益とはなりません。何か付加価値が必要でした。

2013年から5年間のJICA(国際協力機構)の受託事業で、母子保健プロジェクトを行っていた時、栄養改善のため

にモロヘイヤの普及を行い、モロヘイヤパウダーを日本でも販売したこともあります。しかし、現地の人々は、ぬめりのある野菜が苦手で、不評であったことから、もっと栄養価の高いモリンガの普及に方針変更。料理教室を開くと、味が良いと好評だった上に、モリンガの木の驚くべき成長スピードのおかげで、年に数回の収穫・加工が可能でした。乾燥野菜パウダーとして、日本に輸送、何度も細菌検査を繰り返し、高品質のモリンガパウダーを製造できるようになりました。折から、日本でもスーパーフードとしてモリンガがTVなどでも取り上げられたこともあり、売り上げも伸び始め、今では、収益事業の柱の1つになりました。まさに、毎日摂取する健康的な食品で、愛好者の方々がリピートして下さるありがたさがわかりました。さらに「普段使いのお塩の代わりに、モリンガ塩をどうぞ!」と、ヒマラヤ岩塩にモリンガをブレンド。一振りごとに、栄養をプラス、塩分控えめになるモリンガ塩は、他に販売されていないこともあり、人気商品となっています。

また、縫製事業では、技術が向上し以前よりデザイン性も丈夫さも兼ねたバッグやポーチなどをお届けしています。手刺繍をあしらったブローチも近々登場予定です。小物ばかりではなく、エプロンやスカートなどの服飾品にも力を入れています。また、モリンガパウダーとのお得なセット販売も開始しております。農村女性の支援のために、国内からバックアップする方法の1つとして、農村女性が心をこめて作った商品を、日本の皆様の手にとりていただき、愛用していただきたく願っています。アーシャのホームページから、アーシャストアから、いつでもお買い物いただけます。

新しく開設したアーシャストアは、クレジットカード払いも可能です。みなさまのご来店を心よりお待ちしております。



こちらからASHA  
STOREへどうぞ!!



オレンジリボン運動のCharity Marcheに出店中の筆者(左)と村上和子理事(右)



## マキノスクールの卒業生は今……



### 人身売買とたたかう卒業生 ～カンタ・クマリの活躍～

インド事務局長 川口 景子

今回は、マキノスクールの研修コースの卒業生の活躍ぶりの例を一つご紹介したいと思います。

2005年、高校を卒業してすぐに本会が支援する持続可能な農業開発研修コースに参加したカンタ・クマリという女性がいます。インドでも最貧州であるビハール州で、貧しいアウトカーストの家庭の長女として生まれました。両親は子どもを学校に通わせることができなかつたため、枝を集めおもちゃを自分で作って売るなどして、自分でお金を工面して、カトリックのシスターが教える学校で勉強したといいます。研修時、目を輝かせて全てを吸収しようとする積極的な姿勢が印象的で、研修が修了してからも2010年までインターンやスタッフの立場でアジアの活動を支えていました。その後、様々な住民エンパワーメント型の活動に携わり、2017年からジャスティス・ベンチャー・インターナショナルという国際NGOで、ビハール、西ベンガル州の人身売買、児童労働などの犠牲者を救出し、予防する事業のアフターケア調整員として活動しています。そのカンタにインタビューを行いました。

人身売買の殆どは少女への性的搾取を目的としたもので次に借金をかたに労働者を奴隷化する債務労働や、児童労働があります。インドの国家犯罪記録局によるとカンタが担当している地域が世界的に見ても児童買春が多く行われています。小さいころから自身もアウトカースト出身者として、差別や女性蔑視の圧力と戦ってきたカンタは、そういった境遇に陥れられた少女たちに強く共感を寄せています。

「貧しい地域の少女たちは、人身売買のブローカーの男性に疑似恋愛や偽装結婚に騙されたり、仕事で簡単にお金を稼げるという文句で、男性について行ってしまいます。売春施設に強制的に入れられ、暴力を振るわれ、薬物を強要され、逃げられないようにされます。」

そのようにして拉致された少女たちを、彼女の団体はチームを組んで救出しています。まずは、男性スタッフが売春客を装って潜入し、18歳以下の未成年者に声をかけ、どのようにして連れてこられたのかを探ります。そ

の後、警察に連絡を取り、一斉手入れ、売春摘発を行い、法的な手続きは弁護士が、未成年者のアフターケアにはカンタ達スタッフがあたります。

「私の仕事は、まずは少女が家族の元に戻れるように、家族と話し合うことです。それでも半分くらいの家族は、少女を引き取ることを断ります。嫁に出すことが難しくなるためです。家族の元に戻れなくなった少女が生きる希望を見いだせるように私たちはケアします。例えば、シェルター（保護施設）で社会復帰のための職業訓練を行ったり、学校に通えるようにしたり、人身売買犠牲者のための国の支援を受けることができるように身分証明書や書類を作成しています。」読み書きが十分できず、政府の支援についても知識を得る術のない境遇の人たちにとって、社会とつながり直し、生きていけるようにする道筋を作る仕事です。

「カウンセリングでは、人には人権があり誰も犠牲を伴う仕事を強制されるべきではないということ、脅されても恐れずに、いやなら従う必要はないということを確認できるように話し合います。また、最低賃金などの法的な知識を得ることで自分の身を守ることができるので、勉強することも勧めます。」「つい最近では、オリッサからビハールに売られた少女を救出し、家族の元に戻すことに成功しました。奴隷のようだった生活が一変し、胸を張って自由に生きることができるようになった、と心から喜んでいるのを見ると、この仕事をしていた本当に良かったと思います。」

今があるのは、活動するための基礎的かつ実践的な能力をマキノスクールで学び、鍛えられたからだ話すカンタ。このように困難な境遇で育っても、本会が支援する研修コースで学び、大きく成長し、弱者に寄り添って働いている卒業生がいることは大きな励みになります。



奴隷状態から救出された労働者と話をするカンタ（中央）





## 自分と向き合う

青野 勇 (2017年卒)  
愛農学園農業高校農場職員  
アーシャ理事

4年前、私はマキノスクールが行っている持続可能な農業・農村開発コースの学生として10か月間、インドで過ごしました。

自分は何が出来るのか、自分は何がしたいのか。何にも自分のことがわからない状態で私はインドへ行きました。

当時、自分のことを見つめようとしても全然できなくて、外部から自分にとって都合の良いことが舞い込まないかと、たらいの水の法則のように自分の方向に水をかけ寄せていたように思います。そんな状態で、高校卒業にあたり進路を考えなくてはならない時期になりました。自分のことを棚に上げ続けていた自分にとっては苦しい期間でした。日本の大学を受験しましたが上手くいかず、どうしたら良いか全くわかりませんでした。そんな時に両親からアーシャのパンフレットを渡されマキノスクールを紹介してもらいました。生まれてから県外で長期間生活したことも無く、外とのつながりが皆無だった自分、直感で、根拠のない自信をもって何か自分のためになると信じてマキノスクールを選びました。

マキノスクールで学んだインドの生活は刺激的でした。仲のいい関係だと職員と生徒の間柄でも衣服はお互いにシェアしていました。食事は、マサラ（スパイス）抜きには考えられません。現地の人はさらに青唐辛子を食事中に食べます。マサラ生活は美味しかったのですが、私の舌はマヒしていきました。その上で自分の生まれた土地の食べ物は大事な存在だと気づきました。村での住まいは、壁はレンガや土でできていて、水道は無く村で共有の井戸があります。コンロは無く、牛糞で作った燃料を使い煮炊きをして、木々なども用いながら暖を取っていました。なんて素敵な生き方なんだと思います。しかし、スマートフォンやバイク、プラスチックなどの普及が高まってきており、横文字のものが最先端のだという



愛農学園農業高校の生徒と筆者  
(右から5人目)

意識がありました。ゴミとしてプラスチックが村のいたるところに落ちています。このようなことがインドの農村にも広がっていました。



マキノスクール学生時代のクラスメートと筆者（左端）

インドの農村は理想の暮らしなのではと思われれます。自分たちの力で生活が出来ること、人と人がつながらないと生活できないことは大事なことでと思います。私の同室にアヌジュという同級生がいました。アヌジュは自分の本能に従いながら行動していました。彼は初めのうちは僕のものも自分のもののように使いました。仲良くなったら男女問わずに手を繋ぎます。また、家族から離れて過ごすため、家族や彼女と毎日のように電話をしていました。このことから身内や仲間を大事にすることを当たり前のようにしていることがわかりました。最初ころ私は行動に意味が分からず、口論したり、無視したりしてしまいました。しかし、彼は人間らしく苦手なことや嫌なことからは逃げ、好きなことは進んでやり、私との共同生活に悩みながらも自由に生きていました。

こんなインドと私は出会いました。インドの村社会は厳しい現実があります。どんな夢を持っても現実にするのは社会的に大きな壁が立ちほだかります。男女の中でも大きな壁があり、カーストという身分制度の大きな壁があります。彼らには進路の選択は日本人が考えるような自由がないのです。現在、この壁は低くなっているようですが、依然として大きな問題となっています。不平等の中で日々を必死に楽しく当たり前のようには生きていく人と出会いました。その中で私はなんて恵まれているのかと自分の中にある幸せに気付きました。自分たちの力で生活をしていくことの大切さに気付きました。

インドでの経験を通してわたしは三重県にある愛農学園農業高等学校という場所で高校生たちと生きています。自分は何を大切にしていきたいか、答えが少し見えてきた気がします。まだまだ自分のことでさえ分からないですが、道を求めて考えながら歩いていきます。アーシャとはヒンディー語で「希望」という意味です。これからも希望であるような組織であって欲しいと願い、何か力になればと思います。

# インドで暮らしてみても

## AVSの働きと マキノスクールでの暮らしの中で

インターン・関口 明希

4月初めに渡印してからあっという間に8か月目を迎えようとしています。長い暑い季節が終わり、もうすぐ寒い冬がやってくるそうで、いまからヒヤヒヤしています。

私はいまアーシャのインターンとしてAVS（AVSSの縫製部門）で日本側とのやり取りなどをさせてもらっています。AVSの農村女性メンバーは、英語は通じずヒンディー語のみです。私はとても拙いヒンディー語と身振り手振りのみでコミュニケーションしています。ヒンディー語学習をもっと頑張らねばなりません！

一緒に仕事をしていると、言葉の違いと同じくらい文化の違いを痛感します。お互いの言葉も背負っている文化も異なる中で、仕事について伝えるのは大変です。私がちゃんと伝えたと考えていても、相手には伝わっていません。誤解して伝わっていたり。動画や写真を見せたり、自分で実演するなど、相手が理解できる伝え方で伝える大切さを学んでいます。私も根気がいりますが、AVSメンバーも根気が必要ははずです。私を快く受け入れてくれているAVSメンバーには本当に感謝しています。

日本の消費者が求める水準と比べるとまだまだ課題の多いAVSの縫製技術ですが、インドで売っている一般的な縫製品と比べると、AVS製品の仕上がりはとても丁寧です。ここまで達成するのに、たくさんの取り組みがあったと聞きます。日本人である私を快く受け入れてくれているのも、これまでマキノスクールが日本人研修生を受け入れてきた経験があるからです。私が目の前にしている製品やスタッフの技術と姿勢は、これまでの険しい道のりの結実なのだと思います。農村女性が技術を着け、自分に誇りを持って働く場所としてのAVSは、たくさん



AVSの布製品を手にする筆者

の人に支えられ励まされながら作り上げられてきている場所なのだとい日に日に実感します。



まだまだ、AVSのメンバーひとりひとりを私は知りません。工房での様子はある

有機農業組合運営を支援しているインターンをしている松田翼（左）と筆者 アグラにて

程度知っていますが、農村での姿はまだ知りません。マキノスクールの働きをスタッフの皆さんから聞いたり、これまでの発行物を読んでいると、北インドの農村、特に女性をとりまく環境は厳しいそうですし、たまに農村を訪問させてもらおうと貧しい暮らしに驚きます。メンバーの女性たちをもっと知りたいです。

マキノスクールは働きのある場であると同時に、そこに集う人々にとってのコミュニティであると思います。メンバーの朗らかな笑い声を聞いていると、このコミュニティがみんなにとって大切な場所なのだと感じます。マキノスクールに集うスタッフが帰っていく農村コミュニティの暮らしは、日本から来た私には想像もつかないような厳しさや苦しさもあると思います。それでも、マキノスクールというコミュニティに私も受け入れられていること、一緒に働いていること、暮らしていること、笑えることばかりではないけれどもそれでも笑い合えることが嬉しいです。

これから、北インドの農村コミュニティやマキノスクールの働きについて、もっと学んでいきたいと思っています。



AVSの縫製作業に勤しむ農村出身のスタッフ



## アラバード産日本食 お客様の声から

現地派遣インターン 松田 翼

インドではコロナウィルスの影響によりロックダウンが2020年3月と2021年の5月に2度ありました。結果、直面したことは組織の経営難でありました。



組合栽培農家からのコメの入荷をチェックする筆者（右側）

私の担当するアラバード有機農業組合では在印邦人の方を中心とした日本食の取引をさせていただいている関係上、日本人の方々の帰国により、組合の売り上げはそれまでの半分以下となっていました。農家への初代の支払いが滞り、多くの日本米の在庫を抱えながら毎日、資金繰りをいかにして運営を続けていくか。職員一同が先行きの見えない状況を悩み抜いた日々でした。

現在、デリーでは日本人向けの秋のフェア（オータムメーラ）やカフェでの催事が開催されるようになるなど、状況は少しずつ落ち着いてきました。日本食のお取引をさせていただく中で、お客様からいただいたメールや声かけに励まされてきました。

メールの一例をご紹介します。「（商品が）無事に手元に届きました。パッキングも非常に丁寧で、お米の炊き方の解説があり、客目線で工夫がされていると感じました。AOAC（アラバード有機農業組合）の皆さんのきめ細かいサービスが、客の安心に繋がります。・・・早速、玄米を炊きました。弾力があり、味にコクと甘みがあり、美味しく頂きました。白米もびっくりするほど弾力と甘みがあり、おにぎりにして頂きました。美味しく、安心・安全な商品を作ってください、深く感謝致します。これからも定期的に注文させていただきます。」

インド人のお客様の中でも組合の商品を定期的に頼んでくださる方がいらっしゃいます。商品の感想を次のように送っていただきました。

「Our family is happy with the rice we bought. In

particular, it has become a very valuable presence for children and is very helpful.」（我が家では、購入したお米に満足しています。特に、子どもたちにとっては貴重な存在となり、とても助かっています。）

アラバードでも毎週金曜日の早朝に朝市として豆腐とおからクッキーなどを販売しています。毎週を続けるうちに、常連で豆腐を買い続けてくださる顔見知りになるお客さまがいらっしゃいます。商売はお金と物の交換ではありますが、やりとりの合間にお客さまがご自分の話をしてくださることがあります。

「私はコルコタ出身の中国人です。あなたたちの商品は好きだわ!」と仰ってくださいました。コン・リーさんという方で、豆腐だけでなく日本米の割れ米と醤油をお求めいただいております。買っていただいた自分たちも、お買い求めいただいたコンさんとお互いに嬉しさを感じられる一瞬がありました。



朝市の常連客コン・リーさんと筆者（右側）

ここアラバードでは、毎日様々な問題が起こり続けています。長年働いてきたスタッフの突然の辞職や、病気により亡くなる場面にも立ち会ってきました。しかし、組合農家の農作物と職員たちが加工した食材が少なからぬ人たちの食生活を支えている事実も見受けます。

組合に働く、彼ら彼女らの手がけた商品を、お求めいただくお客さまにお届けする橋渡しをこれからも続けていきます。



組合栽培農家の収量を調査する筆者（右2人目）

# アーシャ事務局便り

※ あなたの想いを世界へ、あなたの寄付でアーシャの活動を支援してください

特定非営利活動法人  
**アーシャ**  
 A S H A アジアの農民と歩む会  
 事務局・交流センター  
 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17  
 TEL/FAX 0287-47-7840



## アーシャ活動動画の製作・公開

公益財団法人味の素ファンデーション「食と栄養」国際支援プログラム（AIN）の一環で実施している「北インドと日本をつなぐ食を通じた栄養改善プロジェクト」は最終年度を迎えました。同財団では助成団体を紹介する動画を製作しており、今回、当会の現地活動を紹介します。動画が製作・公開されました。



やっつけている部分というのが

カースト制度が根強く残り、栄養不良の母子の多い地域で当会の活動と村を繋ぐ農村保健ボランティアの育成を柱に、農村女性に食べ物で自分の健康を保つことの啓発、モリンガ栽培・摂取による栄養

インドモリンガで栄養知識の共有 | アーシャ=アジアの農...  
 AIN 味の素ファンデーション The Ajinomoto Foundation

「YouTube インドモリンガで栄養知識の共有」を検索してください



改善、収入向上の普及に努め、最近モリンガを食べる習慣が浸透し始めたと紹介しました。コロナ禍で現地取材ができないため手持ちの動画や写真を提供し、三浦代表理事、現地統括責任者の三浦副代表理事、川口インド事務局長、農村保健ボランティアのシータさんがオンラインインタビューに協力しました。皆様、ぜひご覧ください。

## 会員ご継続とクリスマス募金のお願い

アーシャの活動は会員の皆様の会費と寄付に支えられています。新型コロナ感染の影響により様々な制限はありますが、皆様よりご支援・ご協力をいただき、活動を継続しています。心より感謝申し上げます。2022年度の活動を発展・強化するために、引き続き、会員のご継続と2022年度会費、寄付の納付をお願い申し上げます。クリスマス募金にもご協力ください。

## 写真展・展示販売

10月23日、とちぎ多文化共生フォーラム2021（栃木県宇都宮市）に参加し、写真展・展示販売を行いました。外国人が地域住民の一員として共生していくために、外国人と日本人の交流を深める異文化理解や多文化共生の重要性について、基調講演、パネルディスカッションが行われました。外国文化紹介ブースでは、国際交流団体が各国の文化の紹介、物品販売を行いました。当会も現地活動を紹介します。写真をご覧ください。



## 事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2021.9.1~2021.11.20 順不同、敬称略  
 誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

- |          |   |
|----------|---|
| 賛助会員     | 【栃木県】西田京子【東京都】北澤麻子  |
| 終身個人賛助会員 | 【栃木県】大塚ヒサ、佐々木久雅、溝口浩樹【神奈川県】薄井俊明  |
| 一般寄付     | 【栃木県】朝比奈宏、大浦智子、那須塩原教会、西田京子、丹羽寿美、村上和子、三浦孝子<br>【埼玉県】二宮牧雄【島根県】吉崎彰一【インド】デリー日本人会ボランティア会    |
| 指定寄付     | 【栃木県】大塚ヒサ、丹羽寿美、本田真理、森田咲季、涌泉香織、たんぽぽママのおしゃべり会<br>地球・おもいやりマルシェ、ヒカリノカフェ【埼玉県】二宮牧雄【島根県】吉崎彰一 |
| 物品寄付     | 【栃木県】朝比奈宏、タムラ建設   |

- 会費 個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円  
 個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円
- 郵便振替 加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会 口座番号：00160-0-315147

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 **アーシャ=アジアの農民と歩む会** ☆この会報は日本で製作・印刷しています☆

<事務局・交流センター> 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17 TEL: 0287-47-7840 FAX: 0287-47-7841  
 事務局 朝比奈宏、丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: http://www.ashaasia.org